

第二十章には七基の石幢、第二十一章には石碑及び銅鐘を述べてゐるが、第十六章房山雲居寺の塔以下は關野博士の遺記録がそのまま掲げられ、すこぶる簡略にして、いささか讀者にもの足りなさを懐かしめることは惜しい。第二篇も塔の年代推定には前篇の木造建築と同様科學的方法を採り、いよいよ詳細な建築學的考察を加へて、その建立の年次を決定してゐる。そのために、たとへば朝陽の南塔北塔の如く、從來ただ外形上漠然唐代あるひは遼代と稱せられてゐたものが、本書によつて北塔は唐代の創建に遼初の増修が加へられ、南塔は遼代に成つたものとの詳しい説明が與へられ、また北鎮崇興寺の東西雙塔のうち、西塔が年代的に先行し、且つ手法においても東塔より優れてゐることなどの如きは、一般に正しい知見を與へるものである。その他、朝陽風凰山の三塔、五家子の塔塔(六角九葺)、黃花堂・塔子山の塔塔などは本書をまつて始めて詳細に紹介されたものといへよう。

要するに、本書によつて遼の様式を通じてではあるが、あいまのうちに閉されてゐた唐代建築の様式が著るしく鮮明されるに至つたこと。從來遼金と漠然並び稱せられてゐた建築及び塔が、造式と金式との間に、あきらかな様式上の差異を有すること。さらに宋と遼との間にも構造様式上かなりの相違が存し、遼は宋の様式をうけたものでなく、直接唐につながるものであることなどが具體的に確認されたわけであり、この點ひとり支那建築史の上のみでなく、ひろく東洋文化史研究上にも貢獻するところ大なるものがある。しかし、最後に望蜀の言を容るされるなら

ば、本書に用ゐられてゐる建築上の術語に、いさ少し平易な言葉が置きかへられてほしい次第である。(昭和十九年一月龍文書局刊、四六倍判三四五頁、岡判四三葉、地圖一葉、賣價一四圓六〇錢)〔田村實造〕

彙 報

國史研究室談話會

國史研究談話會は年初以來次の如く開かれた。

一月廿日

仁齋學研究の方法

石田 一良氏

二月六日

高麗版大藏經

東伏見邦英氏

二月廿七日

座に關する一史料

赤松 俊秀氏

堀内他次郎副手 昭和二十一年二月十七日逝去

君は茶道表千家流堀内家に生れ(大正三・十・三)、京都一中・三高文甲を経て本學文學部史學科に入り(昭和十年)、國史を専攻して昭和十三年三月學士試験に合格、爾來大學院に在籍して西田・那波兩教授指導の下に「日本文化ト茶道」の研究に専念、その間昭和十八年五月以來副手として國史研究室の經營に盡力されてゐた。

君は資性顯悟、加ふるに温良恭儉讓の徳を兼ね、常に同學の間に推重されてゐた。先輩も敢て做らざ、後進も亦犯さず、研究室に於いて孜々不倦、夤々努力して自ら誇らぬ舉措は學究の一典型として同僚の範とするところであつた。家庭に於いても起居正しく、傳世の道統に精進して怠らず、昨年夏父君の急逝の後は一門を統率して斯道の維持振興に盡力され、これ又絶大の期待と希望とをかけられてゐたと承つてゐる。

君の學問に於いてはかゝる家傳の職能とわが國史研究室の學風とはよく組合されて一の大綱となり、卒業論文に「林間茶湯」を論究されてより、蒲柳の質を養ひつゝ、研鑽に力め、「村田珠光と茶會の傳統」柴田實編「日本文化史研究」所收、昭和十七年稿、「山里の茶屋と學問の日本的形態」(史林二九卷二號所收、昭和十九年稿)を發表して、その獨特の學業の進歩大成を賜蒙されてゐた。昨秋國史研究室談話會席上發表された「茶室」に關する見解はその成稿の近きを期待され、且つ發病の前夜も尙勉勵して樂しんでゐられたと聞いてゐる。のみならず新しき文運の興隆期に當り、研究室に於ける諸般の企畫にも君の活動に俟つところ大なるものあることを想へば、死生有命とは言ひながらこの人を壯年中途にして失ふことは返す／＼も痛ましい限りである。

二月十二日は豫ての約に従つて、君は西田教授、千道雄副手、久田和彦君及び自分らと共に泉州取石村綾井の專稱寺に招ぜられ、早春の野邊に雲雀の聲をきながら談笑し、茶室の設計に熱

中して時を過ぎたが、夕方高石町高師の濱の永田章氏邸に於ける茶庭の席上俄に不快を訴へられ、同夜は一人留つて靜養に努められることになつた。翌日歸洛の期待は空しく、十四日電報は一兩日靜養して十六日に歸宅との報を齎した。十六日には專稱寺井川定慶氏入浴して、君のたゞ病床にあることを告げられた。よつて十七日早朝より夫人は醫師を伴つて、高石へ長馳されたが、自動車の到着は君の臨終と時を同うした。醫師の診斷は急性腹膜炎、病症は報ぜられた如く輕微でなかつたのである。客舎數日の病臥は周圍の手厚い看護のうちにあつても君の堪へ難きものであつたに相違ない。享年三十有三。遺骸は直ちに夫人に抱かれて歸宅、越えて二十日本邸に於いて葬送の儀が行はれた。法名幽降齋玄譽秀達宗完居士。嗚呼。

謹んで君の靈前に合掌し、蕪穢不文を顧みず君の小傳を草した。追懷を述べる事は別に機會もあらう。たゞ眞を傳へざらんことを恐るゝばかりである。(平山敬治郎記)